

夫の十七回忌を迎える年に
この冊子を出していただくことになりました。
不思議なご縁をあり難く思います。

弥陀のメッセージをあなたに
伝える…

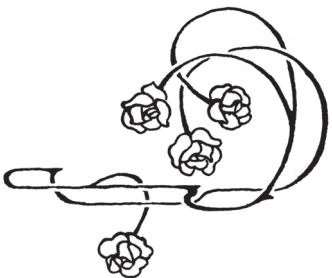
声がなくなっても…
姿がなくなっても…
伝える… 伝えつづける

夫の願いが今またよみがえります。

人間には限りがあるけれど

阿弥陀さまは永遠とわに——

雪山玲子



I 赤色赤光、白色白光

II 人の心の五つのフタ

III 赤ちゃんはかわいい

IV 松若丸さまの誕生日

V 霊よ安らかに、ダメ？

VI お盆のホントの意味

VII 利を競い、名を争う

VIII 美しい紅葉と糖尿病

IX お寺で聞く落語の会

X フィクションと現実

XI お寺を目覚めさせる

XII 四百年前の繁盛ぶり

XIII 正忌に「山を引く」

XIV 贈り物というものは

XV 仏さまといつも一緒



お寺参りを欠かさないおばあちゃんが、

おつとめとお話が終わったあとのお茶飲み話で

「恥ずかしいことやけど、わたしさあ、

七十の手習いで今、阿弥陀経あみだけいを読めるようにしようと、

一生懸命、練習してるんですよ。

けどだめやねえ。お坊さんが読まれるの「

なかなかついてゆけないの。それで、

あああーと、ごごやらわからんようにならなくてしよ。

そしたらあの赤色赤光、白色白光とごうごうで待つとるの。

それでまたついていって、

また、わからんようになつたら、

今度は、若一曰、若二曰、若三曰……

という、あそこで待つとるの「とおっしゃった。

」なるほどねえ、赤色赤光、白色白光、若一曰、若二曰……

あそこらへんは目につきやすいからねえ」と相つちを打ちながら、

そのあと、小経しょうけい（阿弥陀経）を読み出すと、

ふと、そのおばあちゃんの言葉を思い出して

（あーこのへんで、あのおばあちゃんが、待つとるなあ……）

と、思わず心がなごむようになつた。

そして、なにやら心にポツと灯がついた。

そうだ、あの、お経のあちこちで、待つてくれているのは、

なにも、あのおばあちゃんだけじゃない。

生きている人たちだけじゃないと思った。

ギジュキッコドクオンでは、

お釈迦しやくかさまが。

池中蓮華ちゅうぢうれんげのあたりでは、

花の好きだった祖母が。

今現在説法の所にはあの祖父が。

善男子ぜんなんし、善女人ぜんなんにょのあたりには……

そう一緒にご法義よろこんだあの人、この人……。

うれしくなって、そのおばあちゃんにそのこと話したら

「ごうごうやっただね、ごうごうやっただね。」

死んだいいちゃんも、あそこで待つとるんやっただ」と

にっこり笑ってくたさった。

春は眠たい。

医者に聞くと、陽気につれて体内のホルモンの分泌がよくなるそうで、その中に、緊張をやわらげる役割をするものがある、ついコックリ、ウトウト…となるのだという。

だから、この、眠たくなるのは生理現象であって、いたし方ないものなのだと思い込んでいた。

ところが、仏さまに聞くと、

どつやらそうでもないらしい。

人の心には五つのフタがあって、

一に欲、二に怒り、三に睡眠、

四に躁^{そう}つつ、五に疑いのフタをいう。

これを入れ替わりしめ切っているから、

他人のいうことや、仏さまのおことばが耳に入らず、

心に当たらないのだという。

で、問題は三番目のフタの「睡眠」だが、

そりゃあ、眠っていたら

他人のいうこと聞こえないのは当たり前だ、

べつに思っていたが、

よく聞くとこの睡眠のよって来るところは何かといえは、

生理的現象だけでなく、

なんと「無智」からへるのだとおっしゃるのだ。

なるほど、そうか。

学校で先生の話聞きながらウトウトしたのは、

予習も復習も宿題もせずにただぼんやりと、

わからん話を聞いていたからなのだ。

お寺の説教でも、

むずかしいお聖^{よしかみ}教^{きょう}がいたら続くと眠くなるのは、

受けとる側のこちらに知恵がないからというわけか……。

フムフム、とあまりおもしろがってもいられない。

よく考えてみると、ソツとする話なのだ。

つまり、この私が、どんな時に眠くなり

どんな時にチカッと目を覚ましているか、

ということをふり返ってみるだけで、

自分の知恵の程度がわかるというのだから……。

いやお恥すかしい。

